

花山院后諱

殿上之うはなり討

第一

扱も其の後それ天地人の三才を觀するに。

天は地に和して萬物生じ。人は夫婦金胎の

道を守つて子孫絶えず。されば八雲安積山の言の葉も皆これ妹背の媒なり。然れども

其の道に溺る、時んば必ず家を失ひ身を滅

す。茲に本朝六十五代の帝をばオロシ花山の院と號し。奉る。其の頃十二の局の内。

藤壺の女御。弘徽殿の女御此の二人を御寵愛なされしが。中にも弘徽殿の御形。世に

たぐひ無くましまして。いつぞの程より。

弘徽殿に御幸なつて。月に戯れ色香にめで

千代をかねたる御契淺からずオクリとこそ聞えけれ。又時の關白には太政大臣頼

忠公。左大臣源の雅信公。右大臣藤原の家公。兩三人萬機の政を執り行ひ給ふ。さ

て天下の武將をば。源平兩家相守る先づ源氏には。貞純親王。四代の孫攝津守頼光。す

なはち弘徽殿の御後見なり。同じく郎黨には渡邊の綱。碓氷の貞光。卜部の季武。坂田

の公時。平井の保昌。此等五人は天が下に雙びなき勇士なり。扱又平家の大將には。葛

原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤

原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤

原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤

原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤

原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤原の親王に七代の苗裔武藏守正度。是。藤

身近き官女を近づけて。如何に白糸聞き給へ。昨日迄も今日迄も二世とかねたる藤原のいつしか秋の弘徽殿思ひかへられ、刺へ中宮に立ち。一の後には備はるとの風聞なり。

もしさもあらば自らも。彼に従ひあらんこと生きては何のかひあらん。思へばく口惜しやと涙乍らに宣へば。白糸は承り。け

に御道理自らも。よそにて見るさへ世にも無念に候へば。御怨の数々思ひやられて候

なり。御自らつくく存するには。君の御後見平の正度を頼みつつ。弘徽殿を失ふ策をめぐらすべし。幸ひ自らこそ少し好み

の候へば。ひそかに頼み申さんと。フシ事もなげにぞ申しける。藤壺な、めに思召し

。其の儀にてまします。偏に御身を頼むなり。はや疾く疾くと宣へば承り候と。御前を罷立ちやがてひそかに正度を。とある處へ招きつ、始終を委しく語り。御あの弘徽殿一の後に立ち給はば。いよく源氏の

によつて存じたれ。それを意趣討まさん。

地何とぞ智略をめぐらして、弘徽殿を失ふやうに計らひ給へと、フシとしみ。ぐくとぞ頼みける。地元より正度白糸に通ひなれ。色に溺るゝことなれば後の咎も辨へず。

。おう此の段は何より以て易き事。委細心得候と。事も無げに約諾し我が家をさしてぞ。三重歸りける。フシ自宅になれば。地郎

黨の其の中に早見の七郎とて忍びの名人をひそかに近づけ。調やあかやうかやうの次第なり。弘徽殿へ忍び入り女御を害しえさすべし。此の事仕事畢せて有るならば。恩賞

は望たるべし。萬事は頼むとありければ早見承り。地とは一大事の仰かな。さりながら善悪は時の運。随分窺ひ申さんと領掌申しお前を立ち。我が家に歸り用意して忍び入るこそ。三重あやしけれ去程に。地源の頼光

は物事に油断無き心底にて。弘徽殿御寵愛は深ければ。いかさま人の嫉みあるべし自然の事のあるならば。某が誤りならんと常々四天王に仰せつけられ弘徽殿をぞ守らせ

ける。折節其の夜は渡邊の綱が承りにて。細殿口に宿直してこそるたりけれ。調是を

ば知らで早見の七郎。細殿内へ忍び入らんとせし處を。渡邊すかさぬ早業なれば。こ

は狼籍者通さじと一文字に飛びかゝれば。顯れぬると取つて返し逃け行くを。いづく迄かやるべきと築地の内をあなた此方と追廻し紫宸殿の下口にて追詰めたぶさを取つて後へどうと引倒し。起きんとするを取つて押へ首かき落しやあ狼籍者を仕留めたりと呼はつたり。北面の侍ども我もゝと立

出でて松明振立て見てあれば。平家の侍早見の七郎景光なり。人々驚き關白公へ言上申せば。頼忠聞召し。如何さま是は仔細あるべし源平兩家を召せとある。畏つて候とて。既に其の夜も明けければ。やがて使ぞ

三重立ちにける去程に。フシかくて兩家の人々は南殿の大床に伺候ある。調時に關白出でさせ給ひ。今宵弘徽殿へ紛れ者の入りけるを渡邊の綱が討留めたり。見れば平家の侍早

見の七郎といふ者なりと風聞す。それく詮議せられよとぞ仰せける。正度はつと思はれしが騒がぬ體にて罷り出で。さん候其の早見の七郎は某が郎黨にて候が。綱はい

づくに候ぞ尋ぬべき仔細ありとあれば。渡邊は候と御前間近く參上す。正度見給ひ如何に渡邊夜前早見の七郎を藤壺の御方へ警固につけて置きけるが。何たる意趣あつて禁裡にては討つたるぞと申さるる。され

ば某も頼光の仰にて弘徽殿に御番を勤めありし所へ誰とは知らず細殿内へ忍び入り候

故。微塵になさんと飛びかかり候へば。目の早き男子にて取つて返し逃けるを紫宸殿の下口にて追詰め申して候。早見の七郎とは人々の申されしによつて存じたれ。それを意趣討になし給ふは思ひも奇らぬ次第

なり。もし意趣あつて討つならば禁中にて討たずとも。あの早見體のへろゝ武者。五十や百は此の。渡邊が手にためず候と。俾り無くこそ申しけれ。正度聞いて。して

又早見が弘徽殿へ何故に行くべきぞ。證據もなき事申すとも。人をあやめし其の罪いかでか以て通るべき。とう／＼渡邊が首斬つて渡さるべしとぞ申さるる。其の時頼光進み出で如何に正度。狼藉者を討留めて高名したる渡邊なれば御恩賞こそ賜はるべきに。何ぞや御分達の計らひにて綱が首斬れなどとは傍痛き言分やとあざ笑つて宣へば。いやこれ頼光。して端喧嘩は兩成敗とは定まらずや。然らずば皆式目は反古たりとぞ申さるる。やあ正度。禁中の制法を反古なりとは推參なりと變色して宣へば。渡邊の綱申すやう。いや兎角夜前の次第を察するに是藤壺の女御弘徽殿を嫉み給ひ。正度殿を頼み給ふに疑なし。如何に上をかすめ給ふとも天眼は明かなり。其の上早見體の相手に此の。渡邊は及び難く候はんと氣色變つて申しける。時に關白公兩家の色を悟らせ給ひ。地事の次第は後日の沙汰に及ぶべし。先づ今日は兩家ともに退散あれ畏

つて候と。源平とかうに及ばず一度にはらりと立ち給ふ。地時に公時取つて返し。いや是程實否極まりし事を後日の沙汰とはなまぬるし。殊に平家に喧嘩を望むと見えければ。いで／＼喧嘩に及ばんと駈出づるを人々左右に取付いて。こは不覺なり公時。關白公の仰といひ。ことに天子の御庭にて狼藉は叶ふまじきと引立つる。いやさ。恐るゝも時による。是非一喧嘩致さでは全く以て歸らじと駈出でッ々駈出でしけれども。無體に有め歸りける公時が爲體。凄じかりともなかく／＼申すばかりはなかりけり。

第二

かくて平の正度は。急ぎ宿所に立歸り。一門家の子召集め。扱も此の度關白公。後日の沙汰とある上は。重ねて對決逢けん時。藤壺に頼まれて。弘徽殿を失ひ申さんと。早見を忍び入れしこと。遂にはかくれ有るまじき。さあらん時は藤壺の。御身の上はともかくも。我が罪いかで通るべき。其の上早見を討たせつゝ。相手をも取らせずして片手打ちなる御仕置なり。殺する所此の上は。源氏と打果し兩家の運をためすべし方々如何にとありければ。一家の人々承り。御憤り至極せり。此の上はとかう申すに及ぶまじ。さあらば用意致さんと。一門以下の諸侍都合其の勢一千餘騎。堀川さしてぞ。三番せにける此の事かくれ。あらざれば源氏の一門。我も／＼と馳集り。寄せ來る敵を待ちたり。案の如く平家の兵。二條堀川に押寄せて鬨をどつとぞ。揚げにける鬨の聲も。靜まれば平家の方より。武者一騎進み出で。只今爰許へ罷り出でたる兵を。如何なる者とか思ふらん。正度の後見。城の目重茂なり。早見の七郎景光を。藤壺女御の守護の爲。つけ置かれしを無體に討つ。其の相手を取らん爲。是迄罷り向うたり急ぎ相手を出し首を斬り命が惜しくば降參せよとぞ罵りける。時に源氏の陣より平井の保昌進み出で何と申すぞ城の目

此の頃弘徽殿の女御一の御寵愛たる故にそれを嫉む藤壺に頼まれて。早見を忍ばせ弘徽殿を害し奉らんとせし所に。思の外に仕損じて渡邊に討たれし故。後日の詮議を大事と思ひ當座の喧嘩にとりなさん爲。一門を催して押寄せ来る表裏者。ヤアあれ打取れといふより早く我劣らじと切つて出で。火花を散して。三戰ひけるかゝりける所に。平家の方より武者一人進み出で。我はこれ早見の七郎が弟同じく九郎景季なり。渡邊殿はいづくにぞ。藤壺の殿へ入り兄七郎が寢首を打ちしとは抜群に違ふべし。其の上兄の敵なれば人手にはかけまじき。見参やつとぞ名乗りける。渡邊立出でこれを聞き。やおのれ等は面目なき天逆様な言分かな。汝が兄の七郎こそ。弘徽殿をあやめん爲細殿脇に忍びつつ某に討たれけれ。兄弟のよしみなれば汝も綱が手にかゝり兄の跡を慕ひ行けとつツと寄つてむずと組みかさにかかつて押しけれども。九郎も聞

うる大力。藤の纏ふる如く寄添うて。打倒さん／＼としたりけり。やあ汝も少々力ありけりと上帯を引摺み揺り上げ四五返振廻し。彼所へかつばと投棄てて起上らんとする所をやがて首をかき切つて。味方の陣へ引きたりしは潔くこそ見えにけれ。時に寄手の陣よりもいぎみの源惣主馬の藤太別府高瀬を先として大剛の兵ども綱を目がけて駈出づる。公時保昌貞光季武一度にどつと駈合せ。源平隨一の兵ども渡し合せて切結び。思ひ／＼に引組んだり。もとより源氏の四天王。易々と取つて伏せ首をかかんとせし所に公時驪を上げ。如何に方々彼奴等は名高き勇士なり。とてもこの事に生けながら大將軍への土産にせん尤といふ儘に。縛めんとせし所へ平家の大勢一度にどつと懸りけり。渡邊此の由見るよりも。大長刀を走らかし餘すまじきと振り巡れば。又向ひたる軍兵ども一太刀も合せずむら／＼ばつと引いたりけり。五人の人々聲を上げ。やあ

軍はかやうにするものぞ。手並の程をよく見よと。城中さしてぞ入りにける。あつばれ誠の四天王やと警めぬ者こそなかりけれ

第三

さる間。關白頼忠公源平の戦を聞召し。やがて兩家の人々を召して仰せけるは如何に方々。私の宿意を以て洛中を騒がす條以ての外の狼藉なり。上に紛れなき上は下の怒を押へ。兩方共に穩便たるべきこそ忠臣の道にてあれと。委細に宥めさせ給ひければ源氏はもとより。此の軍に打勝ちたれば別儀なし。平家は事を紛らかさん爲なれば仕濟したりと思ひ。畏つてお請を申し。ラシ兩方異議はなかりけり。此の度の濫觴は藤壺の女御。弘徽殿を嫉み給ひ平家を語らひ給ふに疑なし。然れども此の實否を糺しなば。源平の争鬪。偏に天下の大事と御思案あつて。深く事を糺されず都の騒動鎮めさせ給ふ。關白公の御心底有難がりける。三次第なり。是は扱置き。藤壺の女御

は此の由聞召され。白糸を近づけて。さて
も無念の次第かな。本望違けぬのみならず

平家に恥辱を與へし恨み口惜しや。兎角
みづからが敵は弘徽殿なり。此の上は暫し
の内も長らへ胸を焦さんより。弘徽殿と刺

違へ君にも思ひ知らせ奉らん。跡を頼むぞ
白糸と。色調守刀を押取つて駈出で給へば

白糸周章でてすがりつき。地こははしたな
き御有様。先づ此方へと引止む。女御猶も

せきかねて。いや爰を放せ白糸と。振放さ
んとし給へば。女房達は大勢立寄り奥に誘

ひ三重申しけり。フシ此の事かくれ。地あら
ざれば帝大きに逆鱗あつて。内裏には叶ふ

まじ。急ぎ里へ送れとの繪言なり。畏つて
候と。北面の若侍に仰せつけられやがて御

奥さし寄せて。いたはしや藤壺を是非をい
はせず取つて打載せ。里へ送り出せしは

ウレヒ上情。なうこそ三重見えにけれ。フシ
館になれば。地かやうくと引渡し。北面

の者どもは。フシ内裏をさしてぞ歸りける。

爲平夫婦の人々は。大きに驚き給へども
スエフシ繪言なれば力なし。地もとより女御

は胸の焔はいやましに。今はひたすら狂人
の身となりて駈出で。駈出でし給ふ故爲平

詮方無き餘りに一間の獄屋をしつらひて。
うきふし分かぬ御有様いたはしオクッムかり

ける次第なり。地然れども藤壺は葉末に結
ぶ露の間も忘れればこそイロ腹立や。あら

口惜しや無念やと。格子に取りつき悶え叫
び給ひしは身より出せる罪ながらウレヒあは

れと問はぬ三重人はなし。是はさて置き。
地弘徽殿の女御は。藤壺の御身の上を聞召

し。あゝ恐ろしや何事も皆みづからが故な
れば。人に怨をうけし身の行末何と奈良坂

や。このて柏の二道かくる君故に。我も亦
かくもなん。如何なる憂き目に逢ひもやせ

ん。フシ萌え。出づるも。枯るゝも同じ野
邊の草。何れか秋に逢はで。さて果つべき

身にもあらざれば。今日は人の身の上あす
は又。我が身の上と思召し。浮世の無常を

観じつつ暫しオクッムまどろみ給ひけり。然
る處に藤壺の妄念蛇身となり。庭上に現れ

障礙をなすこそ三重恐ろしけれ。フシさて
其の後に。地藤壺の怨靈又いと艶いたる青

女房と現れ。其の様化したる風情にてスエラ
シ妻戸の脇にすごくとフシたたすみける

こそ恐ろしき。地弘徽殿は夢さめ此の有様
を御覽じて。やあ是は如何なる人にてまし

ますぞ。其の時女性答へて曰く。こは愚な
る問事かな。地人の怨を受けながら。名乗

らずとても今は早。園生に植ゑし紅の。も
れても色に出づべしとあれば。弘徽殿胸打

騒ぎはつと思召されしが。フシ心を靜めて
なごやかに。けにく名乗らせ給はずとも

。大方は推量申して候なり。さりながら人
の怨を受けしとは。みづからには何たる怨あ

るやらん。身には覺えなきものをと宣へば。
調なう覺えなしとは愚なり。地ありし昔の

雲の上。共に眺めし月影の。うつればかは
る飛鳥川。花紫の藤壺を追出さるゝは誰故

ぞ。 説話あさましや嗚呼あさましや。蓬生

のひとり。こがるまうき身の程思ひ知らせ

ん。 弘雅其の爲に藤壺の怨靈これ迄現れ

出でしぞや。 弘雅殿は聞召し。あらあさ

ましや嫉妬のねたみは人にこそよれ。互に

押しも押されもせぬ御身に。藤壺の女御

にはさりとては似合ひ申さぬ御事なり。殊

更御身も自も。中宮后にてもあらばこそ。

スエラシ女御の数は多ければ。わきて誰とか

夕まぐれ。恐れながら我が君をつまや夫と

思ひ給ふは愚なり。あさましの御心根やツシ

はやく歸らせ給ふべし。藤壺いよいよ腹

を立てやあ如何に弘雅殿御身が命を助け置

き。君と契を結ばせて。榮花の花を咲かせ

つ。 葎の宿に唯一人。弱る。フシ蟲の音諸

共に。泣き明かさせんと思ふかや。いでい

思ひ知らせんといふよりやがて立寄りて。

さんぐに打散らし少し立退かせ給ひしが

忽ち姿を變じつ。思へばく腹立や。わ

が身は獄屋に押込められ。ウマヒギンハ葉末

の露と消え果つる。御身は君といやましに

。起き臥し小夜の寢覺にも。妾が身の上護

りつ。とやある斯くや成り果つると昔語

になるならば。なほも思は増鏡其の面影の

につらくやとするくと走り寄つて。何

といふとも命を取らでは瞋恚の煙ははれま

じき。思ひ知らずや思ひ知れと散々に打伏

せて今は本望達けたりといふ聲ばかりは有

明の雲に紛れて失せにけり凄じかりける

次第なりフシあら痛はしや。 弘雅殿今はは

や。 たえぐに見えさせ給ふ。女房達我も

くと立寄りて。こはそも如何に女御様御

心は何と渡らせ給ふぞとイロシ各叫び給ひ

けり。 折節帝御幸なり。やあ何事やらん

と宣旨あり。女房達承り藤壺の怨靈のあら

ましを奏聞あれば。主上大きに驚かせ給ひ

。忝くも女御の御手を執らせ給ひ。やあ心

は何とありけるぞや。たとひ限りの命なり

りとはスエラシ少し心を取直せ。フシ如何

にくと仰せける。 今を限りの弘雅殿。

勅説なりと嬉しくて。重き枕をやうく

として少し上げ。あら有難の宣旨やな。た

とひ此の身は消ゆるとも。かねて交せし陸

言の。天に在らば比翼の鳥。地に又あらば

連理の枝。契りしをいかでか忘れ候べき。

生者必滅會者定離は。浮世に遁れぬ道なれ

ば。スエラシ必ず恨かせ給ふまじ。もとより假

の宿なれば。永き住家の蓮壺を恐れながら

半座を分けて待ち申さん。とても叶はぬもの

故に。大内にて果敢くならば穢多し。未だ

今生に息の通はん其の内に。故郷へ送らせ

て給はれや。 フシ我が君様とぞ申さるる。

主上御涙と諸共に。か程に弱る身ながらも

後の穢を思ふかや。お事に別れ何しに位に

あるべきや。朕も思ひ定めたりと繪言ある

こそ有難き。弘雅殿は聞召し。こは其加な

き宣旨かな最期に玉體を拜し奉れば心にか

ゝる雲もなし。早々還御ならせ給へ。君の

これにましませば心亂れて迷ひなり。喃そ

れ人々とありし時中納言義懐左中辨惟成還
幸なし奉れば主上力及ばせ給はず。名残惜
しくも還幸ある叡慮の オクリ程こそたくひ
なき。 痛はしやな弘徽殿。幽かなる聲音
にて。みづからは最早只今過行くなり。空
しき姿を其の儘に。あの花山寺へ送りつつ

。土中につき込め給はれと宜ふ聲も幽かに
て悲しきかなや十七歳。眠れる花の如くに
て。朝あさの露と消え給ふ。義懐性成女房達は

はくくと フシレヒばかりにて各涙を流さる
る。 痛されども叶はぬことなれば。御遺言に
任せつつ。花山寺にて御廟ごぼにつき込め奉る
。弘徽殿の御最期を。上一人じへんより下萬民に
至る迄惜み悲み奉るはさて。けに道理とぞ
聞えける。

第四

雖然に二十五有の内何れか生者必滅の理
に漏れん。況んや老少不定の境をや。さる
程に主上は弘徽殿の御別れ。暫しも忘れさ
せ給はねば晝はひめもす。夜もすがら。悲歎

の御涙に伏沈みイロフシ乾く間もなき御風情
。朝政もたえぐに。今は早雲の上偏に
闇夜に燭消え。涙五更の雨となる。頃は水
無月二十二日の夜半ばかりの事なるに。御
痛はしや帝は中納言義懐左中辨惟成を召さ
れ。それ唐土の漢王は反魂香の煙の内に李
夫人の姿を見。又玄宗皇帝は楊貴妃が魂魄
を尋ねしも。スエラシ方士がありし故ぞかし

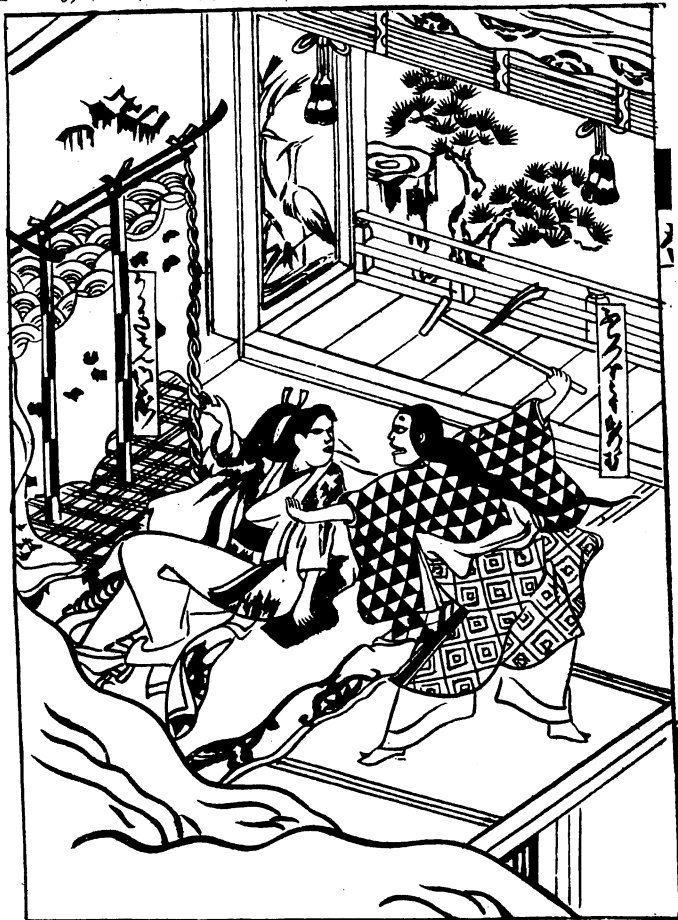
。 痛さて我が朝に於てをや。夢にならでは
見ざれども寝ぬる間もなき我が思ひ。夢の
契りも頼まれず。つくづく事を案ずるにか
く戀慕哀愁の羈きにかゝり。位にあつて何か
せん是を菩提の種として發心修行の身とな
つて。彼の者の菩提をも弔ひ。イロ後世の契
を頼まんと思ひ定めてあるぞかし。君臣の
契もこれ迄なりとの論言にて。御落涙は頗

なり。 痛義懐性成承りこは勿體なき叡慮か
な。哀別離苦の悲みは高き卑きに限りねど
も。深くこれを執するを輪廻の相とて佛も
滅め給ふなり。 痛されば聖武皇帝は。光明

皇后の御別れを悲み。盧舍那佛を建立し。
菩提をとせ給ふなり。さほどに思召すな
らば如何なる大伽藍をも御建立ましまして

。亡き人の御菩提を弔はせ給ふべし。玉體
を棄てさせ給ひては亡者の御爲。却つて罪
業の基とやなり申さんと。フシ様々諫言申さ
るる。 痛イロ帝叡聞ましめて。嗚呼愚なり
方々。されば釋尊は淨飯王の都を棄て。達
磨尊者は南天竺の王子ならずや。かく大國
の主だに。棄つるとあれば塵芥よりも軽く
せり。況してや粟散邊土の小國をや。さ
らばくくと宜ひて御座を立たせ給ひければ
。兩人力及ばず。スエラシ御衣の袂にすがり
つき。 痛かくは申しはんべれども是非思召
し立つ上は。野の末山の奥。蝦夷が島の果
までも。いかでか離れ奉らんと涙と共にぞ
奏しける。さあらばいざとの宣旨にて。御
年十九と申すには十善帝位をふり棄てて夜
半に紛れて貞觀殿の御門より。忍び出で
させ給ひしは例。少き。三重次第なり。是

は扱置き 其の頃天文
 の博士。安倍の晴明と
 聞えしは。神變奇異の
 相人なるが。此の程宿
 願のことあつて日吉の
 社に百日籠りたりし
 が。六月二十二日は結
 願にて。地寶殿に立入
 り湖水遙に見渡して居
 る所に。あら不思議や
 水中より満月一輪現れ
 て。中より二つに割れ
 て雲居 フン遙に上りけ
 り。晴明はつと打驚
 き。それ日月は天より
 こそ出づべきに。水中
 より出でて天に上るは
 逆さまなり。さて此の
 吉凶如何にと暫く考へ
 。是はいかさま帝王



位を去り給ふとの天す
なりと考へ。地大きに
驚きそれよりも取る物
も取敢へず都をさして
ぞ三重上りける。フシ
都になれば地すぐに内
裏に参内し。事の様を
見てあれば。月卿雲客
帝の忍び出でさせ給ふ
を夢にも知しめされず
。紫宸殿に會合してぞ
おはします。調其の時
晴明右のあらまし言上
申したりければ。關白
公聞召され。されば此
の程は女御の御別れに
御懐きやますして。夜
の御殿を出でさせ給は
ず去りながら。地汝が
申す所覺束なしさあら



ば尋ね奉らんと。左右の大臣諸共に御殿の内を彼方此方と見給へども御幸いづくと知れざれば。人々大きに驚きこはそも如何なる事やらんと。スエラシあきれ果ててぞおはします。地時に晴明申すやう。是はいかさま女御の御別れをやる方なき観慮にて。花山寺へ御幸なりしと覺えたり。急ぎ彼所へ御渡り候へと晴明諸共公卿大臣花山寺さしてぞ。三重念がれける。

進行けにや高きも卑しきも思愛妹背の別れ程。フシ世に哀なる事はなし。勿體なくも主上は。十善帝位をふり棄てて。召しもならはぬ草鞋に。イロフシ御足を痛ましめ。義徳儀成御供にて。戀路に迷ふ泡沫のフシオタリ歸らぬ水の。フシ泡とのみ消えにし人の。面影は夢にだに見えざれば。なれし昔の手枕に。語りつくせし睡言の。耳に止り懐しや。忘れもやらぬ戀草の露も思も亂れつゝ。吾が身はもとの身なれども。契りし人の無き故に。月やあらぬとかこちしは。けに埋と

思召す。スエラシ心細き折柄に。寒鴉の浮かれ聲。我を訪ふかと思はれて。哀を催す道の邊に。夜すがらとほす螢火の。おのが思ひのあればこそ。蟲だに胸をや焦すらん。實に在原の業平が。羈中のながめに飛ぶ螢。雲の上迄往ぬべくば秋風吹くと慥きしも。涙比べて哀なり。いとどさへく身を知る引取雨の晴るゝ間もなき中空にハツ、フシ小田の蛙の鳴き添ひて。スエ道も定かに見えざれば。涙を道のしるべにて。やうく運ばせ給ひけれ。横雲互る東明に今日は散り行く花の山。フシ御寺に。こそは着き給ふ。地さて花山寺になりしかば女御の御願に至らせ給ひ。御涙の内にかくばかり。フシ打添ひて共に消えなん玉の緒の。後れ先立つ身こそつらけれと。かやうに詠じ給ひつゝ。百千行の御涙は野邊の草葉を染めぬべし。地かゝりける所に。公卿大臣かけつけて。スエ是はくゝとばかりなり。地時に關白宣ひしは。世は末世に及べども日月未だ地

に落ちず。是は如何なる御事と諫言申したりければ。君敎言もなく逆鱗のやうに見えさせ給へば。安倍の晴明するくゝと罷り出で。誠に以てかゝる御事ならずんば如何で玉體を拜し奉らん。所詮通世の起りと申すも此の御別れ故にて候へば。某が神變にて。弘徽殿を二度。蘇らせ奉らば。御修行を止まらせ給はんやと憚なく申し上ぐる。地君を始め公卿大臣やあ申すに及ぶまじ早疾くくゝとぞ仰せける。承つて候と俄に御廟の御前にやがて壇をぞ三重かざられける。フシ扱て其の後に。地百八の燈明を立てぬれば。只萬燈會の如くなり。五智の如來をかたどりし。五色の幣を五本立て。もとより晴明三國にかくれ無き神變奇異の博士なり。壇上に差向つていら高珠敷をさらりくゝと押揉んで。先づ神降しをぞしたりける。フシ謹上。再拜。再拜。敬つて申し奉る。上は梵天帝釋四大天王。閻魔法王五道の冥官。下界の地には伊勢に神明天照皇太神宮。

雨の宮風の宮。月讀日讀天の岩戸は大日如來。朝熊が嶽には、福智滿虛空藏。王城の鎮守稻荷祇園賀茂春日。貴船は五社の大明神。スエシ鞍馬に大悲多聞天。高きお山は愛宕山。男山には正八幡大菩薩。松尾平野。梅の宮伏見に一品御香の宮。大和に葛城金峰山。吉野は藏王權現なり。塔の峰には大織冠。龍田は木花咲耶媛。熊野は三つのフシお山なり。新宮本宮那智は千手觀音。さて津の國に至つては。天王寺に聖德太子住吉オクリ四社の大明神。四國の地には讃岐に金毘羅。同じく志度寺の觀世音。筑紫に彦山出雲の國に大社。杵築の明神。伯耆に大山。丹後に成相切戸の文殊。近江の國に聞えたる日吉山王。二十一社。ギンお多賀白髭比良の八講。取湖水に現れ。給ひしは竹生島の辨財天。美濃の國には南宮高山劍の權現。越中には俱利伽羅不動明王なり。越後の國には陸上米山彌彦の權現。出羽には羽黒湯殿大日大靈權現。陸奥に至つては。

松島雄島鹽釜六社の大明神。信濃の國には上の諏訪下の諏訪善光寺は三國一の彌陀如來。上野の國に至つて妙義八方赤城の山。下野に日光山。常陸の國に鹿島香取浮洲の明神。武藏に三峰相模は大山不動なり。伊豆の國に三島の明神箱根は兩所の大權現。本地は文殊師利菩薩。富士淺間大菩薩。遠江の國には秋葉駒形苦屋の明神。三河に入つて寶來寺峰の藥師は十二神。尾張の國に一の宮二の宮。三に八劍熱田の明神總じて日本六十餘州に三千七百餘社なり。天にあつては日月星辰二十八宿。大地の底におはします。堅牢地神に至る迄三千大千世界の六萬恆河の諸佛神悉く勸諭申しおろし奉る。たとひ定業限りの命なりとも今一度蘇らせて賜ひ給へと責めに責めてぞ三重祈りける。フシ佛神納受。地し給ひけん天地俄に震動し。御廟二つにどつと割れ女御忽ちに蘇らせ給ひ。君は何處にましますぞ君はくと宣へば。こはそも誠か現かと思はず知ら

ず抱きつき。イロ悅び涙はせきあへず。地かかりける所に。壇の邊に化したる姿現れたり。晴明不思議に思ひやあそれなるは何者なるぞ。其の時彼の者つつ立ち上り。地イロ愚なりとよ晴明。はる、思ひの一念又立歸り妄執の雲。スエラシはらさん爲に來りたり。晴明はつと驚き。さては藤壺の怨靈な。いで、思ひ知らせんと重ねて珠數を押し揉んで。東方に降三世。南方に軍荼利夜又。西方に大威德北方金剛夜又明王。見我身者發菩提心聞我名者斷惡修善。聽我說者得大知慧。知我心者即身成佛。薩婆三變多縛曰羅敎と責めかけ、祈りければ。怨靈大地にイロかつぱと臥し。ウタとあらあら恐ろしの般若聲やこれまでぞ怨靈。此の後、地又と來らじと。いふかと思へば忽ち姿は失せにけり。漢家本朝に。かゝる相人有難しと貴賤上下おしなべ感ぜぬ者こそなかりけれ。

第五

お前に畏り。かゝるめでたき折柄なれば。

此の上は急ぎ遣事あるべき旨奏聞ある。帝

歡聞ましゝて。朕一たび帝位を去りしよ

り重祚の望更になし。圓融院の一の宮を位

に即け四海を治めよとの宣旨にて。乃ち花

山の院と仰がれさせ給ひ月日をオクリ過させ

給ひけり。地公卿大臣力なく。やがて繪言

に任せ圓融院の一の宮を位に即け奉り。一

條の院とぞ申しけるめでたかりける。三重儀

式なりさる程に。地かくて内裏には月御雲

客御前に召され此の度即位の祝儀として。

何にても興あらん事を催し。衣冠の儀は申

すに及ばず源平兩家の武士迄も。皆悉く召

寄せて慰ませよとの宣旨なり。頼忠護んで

承り。扱て有難き勅説かな。誠にか

かる歡慮ならすんば。いかで天子の徳に備

はらせ給はんやと。暫く玉體を拜し感涙を

流させ給ひければ。お前にありし公卿大臣

フシ一度にあつとぞ感じける。地やあつて

何にても興あるべきことを奏聞あれと宣へ

ば。右大臣聞召し。さん候こゝに五條鳥丸

に。櫻井の右衛門と申す者の娘に千代松と

やらんあるなる由。彼こそ今様舞の上手と

承る。是は如何と宣へば。地頼忠公聞召し

尤此の儀然るべしと。やがて奏聞なされつ

歡慮をうけて其の後に。紫宸殿の御前に。

俄に舞臺を飾らせて既に用意と。三重聞えけ

り。フシ定まる日にも。地なりぬれば卿相

雲客五位六位源平兩家の武士迄も残らず參

内申しつつ。上中下段に伺候して。フシ今や

遅しと待たれけり。地さて刻限になりしか

ば。役人舞臺に畏り鼓太鼓の音取の笛。調

子拍子を揃へつつさも面白うこそ。三重、唯し

けれ。フシ心も詞も。及ばれず。地かくて其

の後千代松は。肌には白き練絹や。上には赤

地に秋の野の菊と紅葉を散しつつ。白き大口

折鳥帽子。だみたる扇携へて。搖ぎ小オクリ出

でたる有様は。フシ又あるべきとも思はれず。

れ。カンシ竹の園生の末かけてめでたき。

御代の例にも引くや。子の日の姫小松。千

代に八千代にさざれ石の本フシいはほとなり

て。昔のむす迄。ハルシ萬歳樂と呼ぶふな

る。鶴と龜との齡をば。重ね重ねる舞の袖。

三つ四つ五つ。睡じや。七草なづなよ。なじ

よく。かき寄せてほとくと叩いた。代

々やふるらし五月雨。ひんだの横田の早苗

をしよんほり。しよほくくしよほりと

植ゑたもの。今來る秋に刈らうすよの。面

白や。千代の始の。一踊く。オシ面白の

花の都や。筆に書くともつきせじ。東には

オクリ祇園。清水。落ち來る瀧の。音羽の嵐に

。地主の櫻はちりく。フシ西は法輪。嗟

娥の御寺。ギンオクリ廻らば。廻れ。水車の輪

の。井堰々々の。川波。フシ川柳はイツミオド

リ水にもまるる。野邊の薄は。フシ風にもま

る。ふくら雀は竹にもまるる都の牛は車

にもまるる。茶臼は挽木。くくにもまるる。

放下にもまるる。四

竹の二つの竹の。代

々を重ねて。地打治

まりたる御代かなと

。歌ひ舞ひ納むれば

卿相雲客。イロ一同

に。皆悦の聲を上げ

ウ々ヒ本所々々に歸ら

る。千秋樂は民を

無で萬歲樂には命を

延ぶ。相生の松風颯々

々の聲ぞ樂むく。

右大夫直之正本以

節章句寫之者也

山本九兵衛新板

Handwritten musical notation in a cursive style, likely a form of Shikibu notation. The notation consists of vertical lines with various symbols, including circles, dots, and small characters, indicating pitch and rhythm. The text is written in a dense, flowing script within a rectangular frame.